アフリカ文学と新たなるパンアフリカニズム

ALA第22回年次大会からの報告

元木淳子

「新たなるパンアフリカニズム」をメインテーマとして，アフリカ文学会（African Literature Association, 以下ALAと略称）の第22回年次大会が，1996年3月27日から30日にかけて，ニューヨークで開かれた。本稿は，この大会への参加報告を通じて，現代アフリカ文学および文学研究の動向を瞥見しようとするものである。

1　ALAとは

ALAは，アメリカの大学に籍を置くアメリカ人およびアフリカ人研究者を中心として，世界各地に会員を擁するアフリカ文学の学会である。1975年に，南アフリカの亡命詩人，デニス・ブルータスや，合衆国におけるアフリカ文学研究の第一人者バーンス・リンドフォース等によって，テキサスで創設された。ALA設立の背景には，当時の米国アフリカ学会（African Studies Association，略称ASA）における，白人主導型の植民地主義的体質に対する批判があったといわれる。そのために，ALAは，ASAの傘下には属さない，文学研究に特化した学会として誕生した。設立当初から，アカデミックな団体であると同時に，アフリカの作家や知識人に対する人権抑圧問題等にも機敏に対応しうる組織でもあることが志向されてきた。

主たる活動としては，毎年，合衆国もしくはカリブ・アフリカ地域において年次大会を開催し，年1回の学会誌と季刊の会報を発行している。年次大会では，研究発表の他に，アフリカ人文学者らを招いてその声に耳を傾け，創作と研究の領域を重ねようとする試みがなされている。

2　第22回ニューヨーク大会

本年の大会では，ニューヨーク州立大学ストーニーブルック校の援助を得て，「新たなるパンアフリカニズム」（Pan-Africanism Updated）のタイトルの下に，4日間で47のパネル，180余りの研究発表が行なわれた。アメリカ在中の研究者や学生の他に，ガーナ，南アフリカ，セネガル，ブルキナファソ，ドイツ，オランダなどからの参加が見られ，日本からは，アフリカ文学研究会の宮本正興氏，楠瀬佳子氏の発表があった。連日早朝から夕方まで，複数の分科会に分かれて間断なく発表が行なわれ，昼食時などの合間を縫って，バルバドスのカマウ・ブレースウェイトやガードループの女性作家ダニー・ベベル・ジスレーらによる講演，ナイジェリアのケン・サロウィワらを追悼する会，

ドキュメンタリー映画の上映等が行なわれた。

夜には，エジプトの女性作家ナワル・エル・サダウィによる基調講演，ガーナの女性作家アマ・アタ・アイドゥやジンバブエのシマ・チノージャらによるパンアフリカニズムをめぐる作家フォーラム，アメリカのソニア・サンチェスによる詩の朗読会，1995年のフェスパコ映画祭でグランプリを受賞したマリのウマル・シソコの長編「独裁者ギンバ」の上映会など盛りだくさんなプログラムが用意されていた。さらに，最終日には，人権擁護の闘いに尽力した作家を讃える目的でALAが創設したフォンロン・ニコルズ賞の本年度受賞者，ケニアのグギ・ワ・ジオンゴに対する授賞式が行なわれた。

年次総会では，ケン・サロウィワ処刑に対する抗議決議等が採択され，アフリカの人権問題に関する報告と，救援のためのネットワーク作りへの呼びかけが行なわれた。

3　なぜ今，パンアフリカニズムなのか

さて，ALAでは，合衆国の状況を反映して当然ながら，ディアスポラのアメリカ，カリブの文学をも視野に収めた，アフリカ文学研究が展望されてきた。「新たなるパンアフリカニズム」という1996年のメインテーマは，アフリカとカリブを結ぶ文化的潮流にスポットをあてた，93年のガードループ大会の流れを汲むものである。また，より直接的には，94年にウガンダにおいて20年ぶりに開催されたパンアフリカン会議を意識して設定されたものとも聞いた。新生南アフリカの誕生とともに，アフリカ大陸の政治的経済的枠組みの再編が模索される中で，文化の領域において，作家たちが，国家や地域に条件づけられながら，どのような視線をアフリカ大陸に注ぎ，パンアフリカ的な夢，あるいは幻滅を語ってきたのかを探るものといえよう。

発表内容を地域別に検討すると，ブラックアフリカの作家と作品について論じたものが最も多く，カリブ，アフリカ系アメリカ人作家の研究がそれに続いた。とりわけ，新しい文学研究と教育の確立が急務である南アフリカに関する発表が数多くあり，注目された。マグレブの文学に関する報告は10件近くであった。

また，大学でどのようにアフリカ文学を教えるか，という問題を検討する発表が20件近くあり，そのうちの多くがアメリカの大学における教育問題を取りあげたものだった。これは，近年のカルチュラル・スタディーズの流れの中で，しばしば，カリブやアフロアメリカ文学と競合関係に置かれながらも，アフリカ文学が大学で講じられつつある合衆国の事情を反映したものと思われる。

言語的には，フランス語表現の文学についての発表が，英語で書かれた文学についての発表と相半ばする50件余りに達した。このように，いわゆるフランコフォンの文学の発表が数多く見られる背景には，近年，アメリカの大学のフランス研究において，「多様性」あるいは「多文化主義」を志向する立場から，フランス本国のみならず，広くフランス語圏の研究が要請されている事情がある。フランス古典文学が専門ながら，大学でフランス語表現のアフリカ文学の講義も担当しているという研究者にも出会った。本国以外のフランス語文学が認知されているとすらいえないわが国とは，まことにかけ離れた状況である。民族語表現の文学についての発表は6件と少なく，そのうちスワヒリ語文学に関するものが2件あった。

ジャンル別では，小説を題材とする発表が大半を占め，映画や演劇，詩についての報告も散見された。

4　盛んな女性作家研究

さらに，本大会における特筆すべき現象は，女性作家についての発表が，男性作家を論じたそれの3倍を数える50件近くに上ったことである。具体的には，セネガルのマリアマ・バー，カメルーンのカリクスト・ベヤラ，ガーナのアマ・アタ・アイドゥ，ガードループのマリーズ・コンデ，アルジェリアのアッシア・ジェバール等についての発表が目立った。

たしかに，アフリカ女性作家の活躍は，1970年代以来脚光を浴びており，ALAにおいても，女性作家に関する発表は，ここ数年来つとに盛んになってきてはいる。しかしながら，数の上では，男性作家に比べてはるかに少数である女性作家について，これほどの発表が見られたというのは，実はこのたびの大会に限った現象なのである。また蛇足ながら，今大会において，女性発表者の数が，男性発表者を上回る勢いであったことも，筆者としてはうれしい驚きであった。

ではなぜこのように女性作家研究が花盛りであったのか。その理由を，パンアフリカニズムとの関係において，以下に検討したい。

アフリカ，カリブ，アメリカ各地域の女性作家たちを広く眺め渡してみると，それぞれが，自身の状況に深く根ざしながら，同時に，他の地域の女たちにも深い関心を注ぐ作品を提出していることが分かる。

まず，アフリカ大陸サイドで見ると，たとえば，一夫多妻制を批判し，人種間結婚に対するアフリカ社会の差別の問題を問うたマリアマ・バーにしろ，また，大人の，子供に対する搾取の問題を告発し，フランスにおけるアフリカ人移民労働者の社会にも眼を向けるカリクスト・ベヤラにしろ，そのいずれもが，自身に身近な状況に取材しながら，そこにアフリカ女性全体の問題を見出す視点を提出している。

しかも，これら女性作家たちは，自らの作品に欧米の女性を登場させ，その生き方を批判的にとらえながらも，なお友情関係の成り立ちうる存在として描く場合が多い。これは，作家たちが，欧米のフェミニズムにも無関心でないことを示していよう。

一方，カリブの作家の場合を見てみると，アイデンティティーの探求という，カリブの文学に一貫した流れの中で，女性作家もまた，自身のルーツを求める作品を生み出している。たとえば，マリーズ・コンデは，小説『ヘレマコノン』(1976年)で，父祖の地アフリカへの旅に出た女が，彼の地の独裁的父権社会に幻滅し，女たちに対する共感だけを携えて，苦々しい思いで帰郷する過程を描いている。

また，アフリカ系アメリカ人作家アリス・ウォーカーは，小説『喜びの秘密』(1992年)において，アフリカ人女性を主人公として設定し，割礼儀式の文化的意味を慎重に吟味しながらも，これを女性に対する制度化された暴力として批判的に描いている。アフリカ人女性の状況に対する，作家の強い関心のあり様が示されているのだ。

これら一連の作品に共通するのは，「旅」のテーマである。小説のヒロインたちは，それぞれ自分探しの旅に出て，時に大陸を越え，民族や人種の隔たりをも越えて，各地の女の状況に熱い関心の眼差しを注ぐ。このことは，女性作家たちが，一様に自身の内面を深く掘り下げながら，その結果，孤独の殻に閉じ籠るのではなく，逆に，他者発見の道へと歩み出していることを示している。

このように，真にインターナショナルな対話に向けて開かれた女性作家たちのテキストは，パン

アフリカニズムに，フェミニズムの地平を導き入れることによって，確実に，「新たなるパンアフリカニズム」の一角を形成するものとなっているのである。

5　作家たちの危機意識

さて，作家フォーラムでは，デニス・ブルータスが，「時宜を得た植民地主義の復活」と題された『ニューヨーク・タイムズ』の記事について言及し，この記事が，「独立後40年近くを経て，アフリカ人には自国を統治する能力がないことが明らかになった。平和を望んで，西欧植民勢力の復帰を自ら求める国家も現われている。がゆえに，今一度植民地支配に着手せねばならない」と論じていることの危険性を指摘したうえで，「今や，アフリカ大陸は，安価な資源と労働力の供給源としてのみならず，産業廃棄物のごみ捨て場として環境破壊の危機にもさらされている」との鋭い警告を発した。

これを受けて，ナワル・エル・サーダウィは，当局のたえざる監視下に置かれている，祖国での自身の厳しい状況を明らかにし，政治と，文学あるいは言論の自由の問題とが切り放せないことを力説した。そして，今や，白か黒かの人種ではなく，ドル札の緑，すなわち多国籍企業の資本の暴力が一番の問題なのだと述べ，そのような上からの圧倒的な支配に対して，多様性を軸とした，草の根の闘いを通じての，民衆レベルのパンアフリカニズムが構築されるべきだと訴えた。

また，フォンロン・ニコルズ授賞式においては，グギ・ワ・ジオンゴが，その力強く簡潔なスピーチにおいて，権力の苛烈な弾圧に日々命を奪われつつあるケニアの人々の姿を具体的に描き出しながら，なお，夢を語りつづけようと呼びかけ，聴衆に深い感銘を与えた。

結　語

ALAという世界唯一の大規模なアフリカ文学会が，アフリカ当地ではなく，合衆国で開かれているという事態は，いわば倒立した現象である。

それは，アフリカにおける文学の生産と流通・消費のシステムが，いまだに新植民地主義的枠組み――教育が英語やフランス語で行なわれ，作家がヨーロッパ言語で書き，作品が欧米で出版され，批評され，その国際的名声が，ひるがえって，祖国における作家の社会的地位と一定の言論の自由を保障することになる，という構造――から脱しえていないことの現われである。

と同時に，ALAが，英仏などの旧宗主国ではなく，ディアスポラの合衆国ならではの組織であるという点も見過ごせない。アフロアメリカ文学の市場と，その研究および批評の場が確固として存在するこの国であるからこそ，アフリカ大陸の文学の研究もまた大学で要請され，アフリカ文学に対する一定の需要も認められるのだ。

ALAの大会は，合衆国内外の研究者が一堂に会し，相互に意見を交換する貴重な場を提供している。また，アフリカ文学に関わる人々が，さまざまな政治的立場の違いを乗り越えて，人権擁護の観点から大同団結し，作家たちのペンによる闘いに力を添えていこうとする姿勢は，その対応の実効性という点で問題なしとはしないながらも，大いに評価されるべきものという印象を受けた。

（もとぎ・じゅんこ／大阪外国語大学）